

デザインの研究・実践・教育をつなぐための基礎として

美術教育・千代田憲子

1. 授業の概要

本授業は，美術教育専攻の教科内容に関する科目として1年次後期に実施している。前期に開講しているデザイン研究では，現代のデザインを取り巻く状況を理解することを目的として，資料を読み解いたのちに，デザインサーベイの一環として「道後のおみやげ」に関するアンケートを実施して考察を行っている。デザイン研究は受講者3名であったが，デザイン研究はデザイン専攻の1名のみを受講であった。

<授業の目的>

現代のデザインを取り巻く状況を把握した研究・制作を行うことを目的とする。

<到達目標>

- (1) デザインの関連性を重視した研究・制作を行う。
- (2) プレゼンテーションと検証を行う。

<スケジュール>

- (1) テーマの検討
- (2) テーマを決定してデザインサーベイを行う。コンセプトをたてて，アイデアを検討する。
- (3) 中間発表。
- (4) 研究・制作をすすめ，プレゼンテーションの準備を行う。
- (5) 検証につとめる。
- (6) 最終プレゼンテーション

<授業の工夫>

オリジナル性を重視した研究・制作であることと，対外的な活動が含まれることをシラバスに記載している。

本年度は受講者1名であったために，学部生との一時的な合流や他大学院の研究発表参加により，交流や視野を広げる機会を準備した。これらのことが，モチベーションを維持するためにとどまらず，指導的役割を担う場面や現在の研究の先にあるものを体験して，研究と実践と教育のつながりに対する理解や自覚を促すことが出来るのではないかと考えたからである。

具体的には，授業の前半に，対外的な活動として，「桜井漆器に関するデザイン提案」に取り組み，現地で発表して，アンケートにより検証した。桜井漆

器は，愛媛県の伝統的工芸品として新たな方向を模索しており，地域が抱えるテーマでもある。打ち合わせなどで学部生と行動を共にする際には，支援や指導を自発的に行った。

授業の後半では，今日的なテーマとして「防災グッズとデザイン」に関して調べた結果を，視覚的にわかりやすくパワーポイントでまとめたものを生活造形論を受講する3回生に発表した。パワーポイントによるまとめと発表の習熟度を高めることもねらいのひとつであり，3回生の感想や意見は，それらに対する検証となった。

また，現在の研究の先にあるものの体験としては，博士論文公聴会への参加を試みた。本大学院でデザインを専攻した留学生が修了後博士課程に進学しており，先輩の姿の見学でもある。

2. アンケート結果

受講者数1名のために，他の授業と同様には捉えられないが，参考として基本的事項も5段階評価で行った。

<基本的事項>

あなたはこの科目に意欲的に取り組みましたか。

思う

あなたはこの授業について自主演習をしましたか。

思う

授業はシラバスに沿って進められましたか。

どちらでもない

授業のテーマ・目的は授業展開の中で明確でしたか。

やや思う

担当教官の話し方や説明の仕方はわかりやすかったですか。

思う

授業の中で質問や意見発表の機会は与えられましたか。

思う

授業に対する担当教官の熱意・工夫は感じられましたか。

思う

この授業の内容・レベルはあなたにとって適切でしたか。

やや思う

この授業により，自分の考え方が培われたり，得るところがありましたか。

思う

私語や遅刻などへの適切な対処などにより授業に

集中できる雰囲気は保たれましたか。

どちらでもない

課題導入時の説明と作例や参考事例の提示は、あなたの理解に役立ちましたか。 思う

制作中のアドバイスとチェックは、適切でしたか。

思う

合評の流れ(作品の解説と自己評価、質問と意見交換、総括)と内容は、あなたの参考になりましたか。

やや思う

<自由表記>

教室の状態や学生数など受講環境について

受講生が1人だったことは少し寂しかったです。

今期の取り組みに対する感想

桜井漆器の取り組みでは、下級生との意見交換や作業分担をしながらの進行の中で多くの事を学びました。3回生中心で進められた取り組みでしたが、私は後輩たちよりも多く学外でのプロジェクトを経験していることもあり、少しでも良い手本を示せるようにとの自覚を持って参加しました。また、このプロジェクトでは、自分の提案が実際に形となり、店頭で直接お客さんの反応を肌で感じられたことに、学内の授業では味わう事の出来ない感動と充足感を得ました。それと同時に、実際に形になっていく過程で、自分たちの考えやイメージを正確に伝えるために何度も打ち合わせを要する事や、現実的な問題により当初の提案から少しずつ変更を余儀なくされる事など、様々な立場の人たちが関わってものを作り上げていく事の難しさを痛感し、貴重な経験となったように思います。

次の「防災とデザイン」について調べ、パワーポイントで発表する取り組みでは、発表内容や構成を客観視することの大切さを強く考えさせられました。つつい多く情報を盛り込もうとしてしまいが、情報をより厳選してまとめることや、伝えたい事が一目で分かるようなデザイン構成の重要性に改めて気が付きました。

また、九州大学芸術工学府の博士論文公聴会に参加し、調査の量など論文の中身も大変勉強になりましたが、まず会場の雰囲気に衝撃を受けました。後輩をはじめ、周囲の人々の厳しい目も良い論文を作成する上では必要不可欠なものだと実感しました。

今期のこの授業では、デザイン研究室の中での唯一の院生としての自分の役割を考えながらの取り組みが多かったのですが、まだまだ勉強不足な所も多々ありました。後輩への指導の機会もありましたが、細かな所まで目が行き届かず、思うような指導が出来ませんでした。失敗や間違いを予測する必要があることにも気が付きました。この授業での心残りや課題を今後に繋げていきたいと思えます。

この授業に対する意見(良かったところ)

他の回生との交流が多く、大変刺激を受けました。やはり後輩という下からの目には厳しいものがあり、奮い立たされます。また多種多様な取り組みを通して、毎回異なる考えや課題を見出せました。

この授業に対する意見(改善点)

前期のデザイン研究では、デザイン専攻以外の学生の考えも聞く事が出来、新鮮な意見からの新しい発見も多く、大変面白かったのですが、後期は受講生が自分一人だったため、その点では少し残念でした。

3. 結果のまとめ

今回、初めて大学院科目を取り上げたが、1名の授業は受講者にとって、緊張度の高いものであろうと改めて感じた。学部生との合流も高いハードルであったと思われるが、自由表記からは、院生としての自覚や課題の発見を伺うことが出来、授業のねらいに十分応えている。

のどちらでもないは、2課題のために、前述のスケジュールを2回繰り返したり、博士論文公聴会への参加が加わったためであろう。は1名の場合には不必要な項目であった。

4. 授業の達成度

課題に対して、柔軟かつしなやかにクリアしていく姿は、専門領域の蓄積と深まりを表しており、大学院生の存在を頼もしく感じる。

桜井漆器の提案もアンケート結果で高い評価を得ており、取り組み方も常に模範的で、完成度の高さと共に、学部生にデザインプロセスの重要性を示唆したと思われる。

造形芸術コースは1学年10名であり、2回生から絵画・彫刻・デザイン・工芸の専攻分野に分かれるが、現在のデザイン専攻生は、4回生3名/3回生2名/2回生4名の計9名である。学部生への影響も大きく、院生の存在は不可決であろう。

5. 次年度への課題

大学院の場合は、受講生1名のケースが継続して考えられるので、臨機応変な対応も重要であろう。

今年度行った授業の工夫は、高いモチベーションを保つ原動力になり得たと思われるが、対外的な活動の機会に頼りすぎることなく、他の方法も模索したいと考えている。

また、受講生が、デザイン専攻生ではなく、他の専攻生の場合は、負担が大きすぎる面もあると思われるので、考慮が必要になると思われる。